

IV-25

大区画市民農園に対する利用希望意識の分析

東北大学 学生員○楠 徹明

東北大学 正会員 須田 烈

東北大学 正会員 徳永 幸之

1. はじめに

近年の労働時間短縮による余暇時間の過ごし方の一つとして、都市住民が土と緑に触れ新鮮な野菜を自給し、親子や市民同士が交流する場などとして、市民農園が大都市圏を中心に普及してきている。1989年には市民農園に関する法律、「特定農地の貸付けに係わる農地法等の特例法」が、その翌年「市民農園整備促進法」が成立し、市民農園発展の大きな障害となっていた法的問題の多くが解決の方向へと向かった。これにより既存の市民農園（以下、「小区画型」と記す）に加え、ドイツで発達しているクラインガルテンと呼ばれる長期開設大区画型市民農園（以下、「大区画型」と記す）など、新たなタイプの市民農園の発展の可能性が出ており、これらを提案した文献は発表されているが、利用希望意識に関する研究までは行われていない。

本研究では大区画型を考慮に入れた都市住民の市民農園利用希望意識を調査分析し、今後の市民農園の発展方向を明らかにすることを目的とする。

2. 調査概要

調査対象地区として、位置・地域性などを考慮して仙台市内の15地区を選んだ。一地区に対し約50世帯を無作為抽出し、合計763世帯にアンケート表を配布した。調査は平成6年12月に訪問面接配布及び訪問留置・訪問回収方法で行い、有効回収率78.5%、有効サンプル数599票を得た。

アンケートの内容は、まず小区画型と大区画型の標準的なものの概要（表-1参照）を絵と文章等で提示し、それに対し将来も含め利用希望があるかどうかを質問した。利用希望者に対しては市民農園に対する要望内容なども質問した。最後に全世帯に対し家族構成など各種属性を質問した。

3. 分析結果

(1)市民農園利用希望意識

市民農園の利用希望世帯（将来も含む）は、小区画型、大区画型、両方を合わせると約45%に達する。

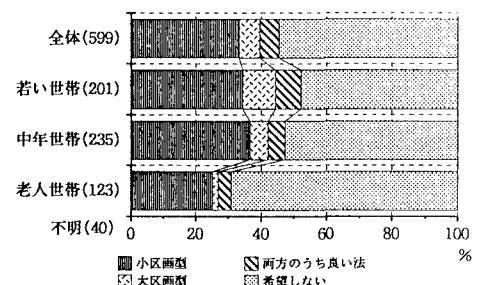


図-1 家族形態別利用希望意識

次に、利用希望意識と各種属性のクロス集計を行い、属性間で分布に差があるか χ^2 検定を行った。その結果、5%の有意水準で有意な項目は家族形態だけであった。図-1に示すように大区画型を希望するのは若い人の世帯に多く、利用を希望しないのは老人がいる世帯で多かった。しかし、いつ借りたいかの質問に対しては、図-2に示すように老人の大部分が今すぐにも借りたいと答えているのに対し、他の世代は「休日などが増加したら」などの条件付きが多い。

(2)大区画型市民農園利用希望者と希望内容の特性

大区画型の利用を希望した世帯に対し施設面、サービス面などの希望内容のうち4アイテム12カテゴリーについて質問し、数量化理論Ⅲ類によって分析した。図-3にカテゴリープロットを示す。これを見ると、Ⅰ軸は施設・サービス水準軸と考えられ、Ⅱ軸は意図明確度軸と考えられ、正の方は要望内容に対する意志を明確に表しているのに対し、負の方は曖昧であると読みとることができる。またカテ

表-1 小区画型と大区画型の主な違い

	小 区 画 型	大 区 画 型
栽 培 制 限	有（樹木不可）	無（樹木可）
一 区 画 面 積	15～50m ²	200～300m ²
利 用 料	約2000円／10m ²	小区画より割高
区 画 毎 の 休 憩 小 屋	共同の休憩施設のみ	区画毎に休憩小屋の設置が可能

リーのグルーピングを行うと、「簡素」「充実」「中間」の3タイプに類型化される。さらに年代別にサンプルプロットを行った結果を図-4に示す。これらに基づき各タイプについて見ていく。

①簡素タイプ：必要以上に畑に手を加えず最低限の施設で十分であり、栽培指導・栽培補助などをあまり必要としない。基本的に小区画型と同じと考えられるが、樹木の栽培が可能ということで大区画型を希望したと思われる。割的にはあまり多くない。

②充実タイプ：更衣室などを備えた多機能休憩施設や個人的な栽培指導などを必要としている。「手入れが行き届かない場合の栽培補助」、「小屋を自分で作成したり依頼する」など、菜園利用以外のレジャーの利用を念頭に入れていると思われる。30歳代を中心とする世代が利用を希望しているがその割合は多くなく、そのほとんどが将来利用を希望している世帯である。

③中間タイプ：大区画型を希望した世帯の多くがこのタイプに含まれる。簡易休憩施設などのある程度の施設、栽培講習会、やむを得ない場合の栽培補助などを必要とする。休憩小屋に関しては、「備え付けの小屋」が適当であるが、「小屋なし」「小屋を自分で作成または依頼する」についても十分考慮する必要がある。

(3) 小区画型市民農園利用希望者と希望内容の特性

小区画型も大区画型と同様な質問を行い、数量化理論Ⅲ類による分析を行った結果、大区画型と同様の3つのタイプに分類できた。年代別分布の傾向も大区画型とほぼ同じであり、現在利用を希望する人の多くが中間タイプと簡素タイプである。

4. まとめ

今回の調査で都市住民の4割以上が市民農園の利用を希望しており、さらにその約1/5は大区画型を希望していることがわかった。

小区画型で現在市民農園を借りたいという希望者は中間・簡素タイプに多く、これらは土地提供者の農家の方々の同意が得られれば、短期間で市内各所に数多くを提供できると思われるため、まずこれらの整備促進が望まれる。また充実タイプの整備も、市民農園の一つのあり方を示す意味でも必要である。

大区画型では簡素タイプを樹木の栽培可能な小区画型とみなせば、大区画型の利用を現在希望してい

る世帯は中間タイプがほとんどであると言えるため、まず中間タイプの整備が望まれる。ただし各区画毎の休憩小屋のあり方は、簡素タイプと充実タイプの一部を吸収する意味でも、利用者が多様な選択肢の中から選べるような体制が好ましいと思われる。充実タイプは若い世代に将来借りてみたいという希望が多いことから将来的には充実タイプの整備も検討対象となろう。

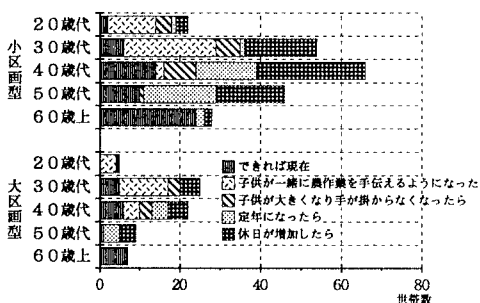


図-2 年齢別利用希望時期

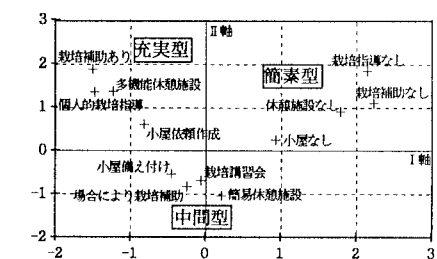


図-3 大区画型利用希望者の要望する施設サービスの類型(数量化理論Ⅲ類)

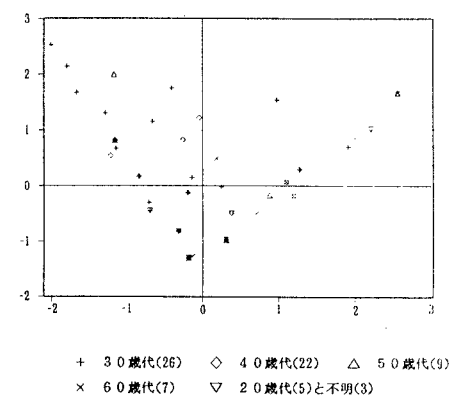


図-4 年代別サンプル・プロット

<参考文献>

1) 定井善明, 近藤光男(1986): 市民農園の需要に関する住民意識の分析, 日本都市計画学会学術研究論文集